
四季都物語

井戸ノくらぼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四季都物語

【Nコード】

N6212Z

【作者名】

井戸ノくらは

【あらすじ】

秘密を抱えた王子の冒険譚。舞台はアジア〜ヨーロッパ。どことなくファンタジーです。コンセプトは「源氏物語+リボンの騎士）あとBASARA?」+ハムレット」みたいな感じです。

<登場人物> (随時更新)

華亮ファラン… 騎馬民族帝国イムハン朝の第二王子として生まれる。

また、動物と心を通わせる能力がある。異人の母を持つ。

聡明で心優しいが時に優柔不断（初期設定）。生まれついで秘密があるために、少し内向的な面がある。

いじめたくなるような美少年タイプ。

翔豪ジャンハオ… ファランの従兄で武道の達人。

一番の親友であり、文武凡ての面においてライバル。

性格は至って明朗闊達、勇敢で頼もしい。

淑陽シユウヤン… ミルヴァル帝国から政略結婚により嫁いできた、ファランの義母。

本名はマリーゴールド。ファランの実母（故人）と生き写しであり、

ファランの秘密を知りながらも姉のように接してくれる。

思慮深い海のような女性。

美鈴メイリン… 翔豪の妹。 ややお転婆で素直で明るい娘。

ややブラコン？で、ファランのことも心から慕っている。

蒼武^{カンウ}…イムハン第一王子。ファランの異母兄。オレサマ系。
どことなく高圧的で近寄りがたい冷徹な雰囲気を持
っている。

玄峰^{クエンフウ}…年若くしてイムハン王宮に仕えるようになった男。
寡黙で有能だが、何を考えているのかわから
ない。

威龍^{ウエイロン}…イムハン朝十二代皇帝。ファランの父。
歴代の中では最も勇気を讃えられた。

鳳潔^{フエンジエ}…威龍の皇后であり、蒼武の母親、ファランを目の敵にする。
ヒステリックな性格。

白瑛・黒曜^{バイイン・ヘイヤオ}…ファランの飼っている猫。

プロローグ

プロローグ

若い人、あんた、旅の人かね。この地に来るのは初めてのようじやな。この地はカサ・プリマヴェーラと言って、ある英雄が建てた楽園じゃ。英雄と言ってもな、逞しい大男じゃあないぞ。わしは見ただよ、薔薇色の頬に、長い睫毛、まだあどけなさの残る、かわいらしい子じゃった。しかしその心には、誰よりも強く確かな炎があった。あの子はわしらの長い間待ち侘びた希望の光だった。そうでもなければ、あの闇の七日間を生き抜くことはできなかつたじゃろうて。

昔、この大地には数十の辺境小国と四つの大国があり、それぞれ協定を結び傍目には穏やかな日々が続いていた。この頃は、殆どの国を治めていたのが女性で、「賢女の時代」と呼ばれたものだ。

しかし、その安寧を破つたのは広大な領地を持つミルヴァル帝国じゃ。事の発端は女帝ドロシノーアが皇帝の座に就いたことを快く思わなかつた隣国ポリモトスのアウグストス王がミルヴァルの領地に侵入したことじゃった。ドロシノーアはポリモトスの反対に位置する南のニサール公国の妃マルグリートと直ちに手を結び、さらに騎馬民族帝国イムハン朝の長、威龍帝とも協力してアウグストス王の包囲に掛かつた。そこから始まつたのが五カ年戦争じゃ。

戦が泥沼化する中、イムハンの王宮で赤ん坊が生まれた。玉のよう光り輝くような美しい子でな、宮中の者は誰もが皆その子を一目見れば虜になるような愛らしさ。それもその筈、その子は異国より囚われ後宮に入った美しい娘が、皇帝の寵愛を受けて生まれた子どもだったからじゃ。母親は異人であることと、皇帝の寵愛を一身に受けていたことから後宮の女たちからは疎まれ、皇帝の姉であり

正妻である皇后からも口では言えないようなことをされて、産後は病に臥せっていたが、子どもの可愛らしさには誰も手を出せなかった。この赤子は、腹違いの兄である直系の皇太子をさしおいて、後継者になるかと思われるほど宮中の人気者じゃった。漆黒の髪と翡翠色の瞳をした美しい子は、「光の御子^{みこ}」として聡明に健やかに育っていった。

旅の人、興味があるようじゃな。あの子の物語は、そう、もう少し大きくなったところから始めてもよいかな。闇の七日間を越えてこの大陸から争いを消した、光の子の物語を。

あの子の名前は華亮、ファランという名前じゃった。それでは、物語はファラン十歳、母の死後から始めるとしよう…。

1 光の御子

朝の光が、ツインユニンを包み始めた。イムハンの都ツインユニンは、領土を南北に分かつ大河、幽江ゆうかうの畔にある。高い外壁に守られた都内のなだらかな坂の頂上に、王宮である彩露城さいろうはあった。中央には謁見の宮殿、右翼には皇帝の執務殿があり、左翼にある後宮が、妃や皇子たちの寝所だった。

小鳥の声と共に目覚め、彼らの歌や会話に耳をすませながら寝台から降りて庭に向かう、幼い皇子ファランの姿があった。

ファランは朝が好きだ。早朝の澄んだ空気に、寝着も少し冷たい。後宮の庭も、春になるまでもう少しだ。囀り戯れる鳥たちは、今日行われる婚儀の話で持ちきりだった。

「今日お輿入れする姫はどちらの国から来るの？」

「ミルヴァルからさ」

物心ついた頃から、ファランには少しだけ不思議な力があつた。

生き物たちの声が、人間と同じように会話しているのが聞こえてくるのだ。その力は、おそらく二年前に亡くなった異国の出である母から受け継いだのだろう。母は、薬草の煎じ方も、風の読み方も教えてくれた。亡くなるまでの半年ほどの間は殆ど起き上がることもできず、抱きしめられた記憶もあまりないが。

「それはまた、遠路はるばるだねえ。まだ十四歳って言うじゃないか」

「ああ、協定の為とはいえ、まあ体のいい人質だね」

ヒトジチ、という言葉は耳慣れなかった。ファランの語彙はこの

ように生き物の言葉から学んでいる。そして、決して遣い方を後宮の女官たちには訊かない。どこで覚えたのかと詮索されるからだ。

ともあれ、今日はお父様の結婚式なのだ。イムハンの皇帝である父・威龍は、ファランの母を亡くしてから失意の日々を送り、ファランの成長だけがこの世の慰めのようになっていたから、家臣たちも心配したのである。そう考えていると女官の一人が朝湯の迎えに来て、鳥たちの最後の会話を聞き逃してしまった。

「それにしても、よく見つけてきたもんだね。生き写しって言うじゃないか」

「そりゃあ、そうでなければ陛下も後宮に迎えようとは思わなかっただろうさ」

浴槽から立ち昇る蒸気を大きな瞳で見上げるファランに女官は話しかけた。

「さあ、ファラン殿下。今日は特別な儀式がございますから、いつもよりお支度に時間がかかります。どうかのんびりなさいませんよう」

「その式、ぼくも出るの？」

寝着を半ば脱ぎながらファランは尋ねた。

「勿論でございます。ファラン様はイムハン朝第十二代皇帝の第二皇子でいらっしやいますから、陛下のお近くにお席を造り申しあげておりますわ」

「お父様は…結婚なさるの？ なぜ？ 鳳皇后もいらっしやるし、お母様以外にも、たくさんお妃はいるよ」

十歳の子どもの率直な疑問に、女官は少し躊躇った。

「ファラン様…。陛下はお立場上、沢山のお妃を持つことになって
います。それに、今度の婚儀、いえ結婚は、隣国ミルヴァルとの大
切な絆を深めるためのものなのですよ」

「…それじゃあ、その人は、ミルヴァルとイムハンが決めた結婚の
ために、望まないでもここに来るんだね？」

「それは、…官僚たちが方々より手を尽くして、やっと陛下のお眼
鏡に適った、いえ陛下が望まれた方でございますから…」

言葉を濁す女官に、ファランはこれ以上追究すべきでないことを
悟った。

「そっか。じゃあ僕は第二皇子で良かったな。皇太子になったら将
来沢山お妃をもらわないといけないんじゃない、大変なもの」

「そ、そうですね」

子どもらしい感想に、女官も安心したように息をついた。

「^{メイファラン}梅香、もうあとは自分で出来るよ」

「いけませんわファラン様、朝のお支度は私どもにお任せ下さい」

「いいんだよ！ ぼくだってあとちょっとで大人なんだぞ、いいか
らぼくが呼ぶまで外で待っててよ！」

ファランの剣幕に気圧された女官は、慌てて深い礼をすると立ち
去った。

「ファラン様、普段は優しいお子なのに、朝のお支度はしよつちゆ
う機嫌が悪くなるわ。生まれた時占い師が『人を統べる座に着く』
と言ったというのに、こんなに情緒が不安定なのは、やはり静旭様
…お母様が亡くなってからかしら…」

とぶつぶつ言いながら。

邪魔者がいなくなつて、ファランは浴槽から盥たらひに湯を少し移し、部屋から隠し持ってきた袋を開けて中身を溶かした。暗褐色に近い紫色に湯が染まる。癩癩を起こした振りをすれば、女官は自分を一人にしてくれるのだと、そういうことも何時しか知った。

ファランは自分の頭髪にその液体を少しずつ馴染ませていく。母から教えてもらった、薬草で作る染髪剤だ。毎日する必要はないが、それでも一週間と空ければ根元の色が変わってしまう。今日は人前に入る日だから尚更用心せねばならない。

ファランの毛髪は実は亜麻色である。黒色の髪が通常のイムハンの民族において、亜麻色の髪に緑の瞳では、いかにも異人の子と疑われるだろうと恐れた母の、わが子を護る為の策であった。床に臥すまでは、自らやつてくれていたように思う。

髪を濯いで、浴槽に身を沈めながら、ファランは、もう一つの自分の体の変異と、もう一つの母の言葉を思い出していた…。

「王位継承権、か…」

下着をつけ部屋に戻ると、先程とは違う女官がおり、ファランの礼装を用意していた。金糸や銀糸で刺繍された、眩まはゆいばかりの衣。ファランは目を細めた。どうしたってこのような華麗な物には気が退けてしまう。

婚礼は昼からで、まだ時間はある。礼装を着る時間をできるだけ先延ばしするために、朝食を済ませるとファランは従兄いとこを探しに王宮の廊下に出た。彼もきつと、この時間ならぶらぶらしているに違いない。

思った通り、従兄・翔豪は着替えもせず、後宮と中央宮殿を結ぶ廊下から、蓮池に小石を投げていた。針金のような漆黒の髪と、鳶

色の切れ長の瞳が印象的な少年だ。翔豪は皇帝の弟の子で、ファランの一つ上の皇子だ。しかし、立場上は下位ということになる。

「鯉に当たったらどうするんだ、翔豪」

「鯉じゃないよ、あの葉の上を狙ってるんだ」

立場の上下があるとは言え翔豪の口調はいつも気さくであり、ファランもそれを気に咎めることはなかった。二人はむしろ双子の兄弟のようであり、一番の親友であり、文武凡ての面においてライバルでもあった。

確かに、翔豪の指差す先には小石の乗った小さな蓮葉があった。入りにくい場所が的になっているらしい。

「つまらないな、今日は時間が少ないから、狩にも行けないし剣の練習もできない」

「そつだな」

ファランもまた同じように蓮の葉めがけて礫ついでを投げてみた。やはり、なかなか思つようには届かない。

「第一この結婚式は、お前には関係あるけど、オレにはない」

「そつ言つな、ぼくだって退屈してるんだ」

「どうせなら逃げちゃうか？」

「どうやって？」

「この間見つけたんだ、後宮のある部屋に、秘密の抜け穴があるんだぞ」

「すごいな」

「式の間までまだあるから、行ってみないか」

ファランは従兄の誘いに頷こうとした。

「いや…やっぱりダメだよ」

「どうしてさ？」

「ぼくが行かないと、お父様やみんなが心配するもの」

「そうか、大変だな、“光の御子”も」

「代わりに、今夜行ってみない？」

「いいよ、じゃあ約束だな」

ちょうど、翔豪付きの女官が探しにやってきた。しづしづ二人とも自室に行き、各々着替えを終えると中央の宮殿に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6212z/>

四季都物語

2011年12月22日00時45分発行